

もりは無く、面白がつて接触してきたのは明らかだった。それでも言葉の通じる相手と交渉ではない会話をすることで彼の心は慰められた。人間と接触する事を拒み続ける夕夜にとつて、人間に似ているが巻きこむ心配も気遣いも不要な存在は都合が良かった。そんな利己的な理由で追い払わないのだから、この男が自分を面白がつて弄ぶつもりでいるのだとしても一方的に文句は言えない。力を抱えて一人朽ちていくしかないのなら、この悪魔に好きにされたところで今更何が変わるものか。そう自嘲を繰り返して、彼は今夜も悪魔に犯された。

「……それで、弟は殺されちゃったわけだ。兄は罰を受けて荒野を永遠に彷徨うさだめを与えられた」

殆ど服も乱さずに行為を終えたロキはベッドの縁に軽く腰掛けて、猫が眠る時のように丸くなる夕夜を眺めながら笑んだ。

「ねえ夕夜君、もうちよつと僕を歓迎してくれないかなあ。たまには僕が来る前にシャワー浴びて、可愛い格好でもして待っててくれるとか」

「どうしてあんたを着飾って迎えてやらなきゃならない

んだ。だいたいあんたはいつだって予告無しに突然来るじゃないか」

「先に言っておいたら待っててくれるのかい？」

「そんなわけあるかっ！」

ロキがいつもこんな調子だから夕夜もついつい気安い口調になってしまふ。警戒も随分薄れたけれど、目的が分からない以上まだ心を許すわけにはいかない。夕夜だけならともかく夕夜を利用して何かやらかそうとしているかもしれないのだ。

「あ、じゃあ今度僕の使役してる悪魔で遊んでみない？ オモチャの代わりになるような面白いのが揃ってるんだよ」

「何がじゃあなんだ！」

「絶対気持ちいいからさあ」

「……変態」

何をけしかけられるかも分からないのに領けるはずがない。そっぽを向いた彼を眺めやり、男はまたにやにやと笑った。

「キミは可愛いねえ。イイよ。凄くイイ。……そうだ、あの男死んじやったよ」

「誰の事？」

「自分が魔王になってやるなんて嘯いてた奴だよ。せつ